様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２７３９

研究課題名（和文）口語資料に基づいた日本語文法の変化に関する認知言語学的研究

研究課題名（英文）A Cognitive Linguistic Approach to the Grammatical Changes of Spoken Japanese

研究代表者
尾谷　昌則（ODANI, Masanori）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：１０３８２６５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：雑誌『キネマ旬報』（復刻版）を5年分、さらに雑誌『世界』を約36年分スキャンしてOCR化したことで、昭和期の日本語の簡易コーパスを作成することができた。また、「なので」が接続詞化した現象について、その変化のプロセスが5段階に分けられること、発話調整機能を高めるという語用論的動機があったこと、逆接の「なのに」に比して「引っ張り効果」が乏しかったために、「なのに」よりも接続詞化が遅れたことなどを明らかにした。さらに、「案外」と「意外」の副詞的用法については、「意外と」よりも「案外と」の方が早く出現していたこと、「意外と」が「案外と」からの類推によって生まれた可能性が高いことなどを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
新しい語形が出現したプロセスを詳細に記述・分析することで、それを単なる誤用としてではなく、言語学的に妥当な出現理由があることを示すことができた。また、新語形が出現する際の動機付けとして、類推ネットワークモデルによる説明が有用であることを示すことができた点は、認知言語学理論にとって大きな成果となる。加えて、本研究で構築できたプライベートコーパスは、日本語の言語変化を研究する上で、今後も非常に利用価値が高いものであり、学術的にも一定の意義があると言える。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the grammatical changes of Modern Japanese and try to explain them by using the analogy-based network model. The first case study is on the Japanese adverbial conjunction “nanode”, which has emerged in 1960s through the analogy of contrastive conjunction “nanoni”. The second case study is on the Japanese adverbial usages of “igai-to” and “angai-to,” the former of which has emerged in 1950s through the analogy of the latter.
This study also focuses on building the private corpus of Japanese especially in Showa period. By scanning a lot of old magazines into PDF files and OCRing them, I could build a private corpus composed of over 600 text files, whose total size is over 80MB.

研究分野：日本語学

キーワード：言語変化　類推ネットワーク　文法化　認知言語学　用法基盤モデル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

いつの時代も、「ことばの乱れ」を嘆く声が聞かれる。しかし、それら全てが単なる「誤用」として片付けられるようなものではなく、中には言語学的にみて妥当な（もしくは、一定の理解が得られる）変化と見なすべき事例も多いと考えられる。例えば、ラ抜き言葉などは、一見すると「ら」を省略した簡便な口語表現であるが、ラレル形が持つ〈可能〉〈受身〉〈尊敬〉といった複数の意味から、〈可能〉の意味だけを表す専用形を無意識のうちに作りだそうとしたと言われている。

しかし、全ての言語変化において、このような視点から研究が進んでいるわけではない。例えば、接続詞化した「なので」などは、「くずれた感じ」「軽い感じ」「甘えた感じ」「説得力に欠ける」といった語感があると指摘されているが、これを「妥当な言語変化」として論じた文献は意外に少なく、公的な場では使用を控えるべきという実用書の指摘だけが一人歩きしている状態である。

２．研究の目的

本研究では、上記のような問題意識に基づいて、以下のような 3 つの目的を設定した。

（1）言語変化の調査を行うために、昭和期の言語資料（雑誌や対談本など）を大量にスキャン＆電子データ化し、簡易コーパスを作成する。

（2）上記のコーパスを用いて、接続詞へと変化した「なので」「ってゆうか」と、後接する助詞が変化・省略された「案外に／と」「基本（的に）」の言語変化について記述する。

（3）これらの言語変化を、Langacker(2000, 2008)の動的用法基盤モデルを改良した「類推ネットワーク・モデル」を用いて「妥当な言語変化」として説明すると共に、このモデルの有用性を示す。

３．研究の方法

事例研究として取り上げる予定の表現（計 4 つ）は、いずれも口語的な表現であるため、口語データを大量に必要とする。また、これらの言語変化はどれも大正～昭和期に起こったと推察されるため、口語データの中でも特に昭和期のものが必要になる。しかし、国会会議録を除いて、そのような言語資料は容易に検索・収集することができない。そこで、本研究では、大正～昭和期の、なるべく口語に近い言語資料ということで、対談やインタビューが多く掲載されていると思われる雑誌に注目し、そのデータをスキャナーでパソコンに取り込み、OCR 処理を施すことで簡易のコーパスを作成した。使用したソフトは、縦書きに強いとされる「読取革命」(ver.15)と、細かな読み取り設定ができる WinReader Pro15 である。

最初に取り込んだ雑誌は、復刻版『キネマ旬報』である。こちらを選定した理由は、映画評論家や俳優などの対談記事が掲載されているからである。当初は、全ての復刻版（20 年分）を購入予定であったが、単価が非常に高額であり、配分額を全て費やしても 9 年分しか購入できないことが判明したため、5 年分(昭和 11 年 1 月号～昭和 15 年 12 月号までの計 174 冊、配分額の 55%に相当)のみ購入した。文字のかすれなどもあるため、OCR 認識の精度はそれほど高くなかったが、対談の部分については段組が定型のものが多く、まずまずの認識精度であった。

次に、戦後のデータを補完すべく『世界』(岩波書店)の古雑誌を約 35 年分（1955 年～1991 年まで。若干の欠本あり）と、市販されている対談本(約 40 冊)を購入し、パソコンに取り込んだ。

さらに、市販の小説も 200 冊ほど取り込んだ。こちらは、青空文庫にはまだ掲載されていない 1980 年代、1990 年代の文庫本を中心に選定した。雑誌『世界』を取り込んだときもそうであったが、ページの上下にあるヘッダーとフッターも一緒に OCR 処理されてしまうため、ページ番号や章のタイトルといった文字列が文章内に混入してしまうという問題が生じた。「読取革命」のテンプレート機能を使用して、ページ上部の文字列を認識しないように設定もしたのだが、少しでもページサイズが異なると、ヘッダー情報を読み取ってしまったり、逆に、認識して欲しい本文の一部が認識されずに欠けてしまったりしたため、その都度調整が必要になり、膨大な時間を費やすことになったのが誤算であった。

以上のようなコーパス構築作業は、当初は初年度のみですべて完成させる予定であったが、上記のように OCR 処理の精度を上げるために試行錯誤する時間が想定以上に必要となったため、2 年目と 3 年目にも OCR 作業を行わざるを得なかった。しかし、事例研究を進めないわけにはいかないので、2 年目からは「なので」の事例研究を同時並行で進めることとした。

４．研究成果

① 作成したコーパス

認識精度の問題はあるが、『キネマ旬報』（5 年分、174 冊）や『世界』（35 年分、約 400 冊）などを電子データ化し、OCR 処理を施したことで、当初の研究目的（1）についてある程度達成されたと考える。対談本や小説などのデータを合算し、約 80MB ものテキストデータを抽出することができた。これらのデータは、著作権の関係で WEB 公開できないのが残念であるが、いずれ公開できる時期が来るならば、ぜひ公開したいと考えている。

② 尾谷昌則(2018)「「なので」の接続詞化とその用法について」（口頭発表、2018 年 10 月、日本語学会 2018 年度秋季大会）

この発表では、「なので」の接続詞用法が接続助詞用法からの再分析によって生まれたという仮説を「再分析説」と呼び、その妥当性について批判的に検討した。再分析の萌芽とおぼしき「なので」の使用例は、本課題で収集したコーパスと、青空文庫や国会会議録などを調べた限りでは、1925 年と 1930 年に見られた。しかし、使用件数が 2 件と少ないことと（＝頻度の問題）、実際に接続詞用法が使用されはじめた 1950 年代とは時期が重なっていないこと（＝連続性の問題）、さらには、「なので」ではなく「ので」が接続詞化しなかった理由が説明できないこと、という 3 つの観点から、「再分析説」の妥当性が非常に低く、尾谷（2015）で主張した「指示詞省略説」の方が妥当性が高いことを論じた。

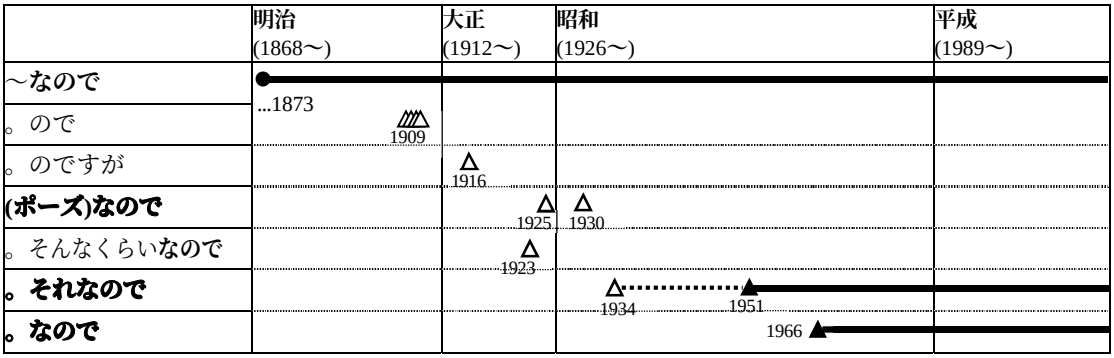

表 1：　ノデ系表現の使用状況

また、同じ順接の接続詞「だから」に比して、「なので」は統語的な制約が非常に多いことも明らかにし、「なので」はまだ文法化や主観化が進んでいないということも論じた。例えば、「だから」を使用した慣用的表現は様々あるが、それを「なので」に置き換えると、どれも不自然な表現になってしまう。

(1) {だから／*なので}（です）か、日本の科学論文が減っているのは。
(2) {だから／*なので} といって、予算が増えるわけではない。
(3) {だから／*なので} こそ、競争的資金を獲得しなければならない。

他にも、対話的な場面で使用する以下の「だから」は、「なので」に置き換えができない。これらは、一度共有したはずの情報を聞き手に忘れないでほしいと促したり、聞き手の発話が不十分であるために情報を追加するよう促したりするものである、主観化を通り越して間主観化の段階まで進んだ用法であると考えられるが、「なので」はまだこのような用法の拡充が起こっていないものと推察されると主張した。

(4) A「じゃあ、仕事に行ってくる」
　　B「どこに行くの？」
　　A「{だから／*なので}、仕事だよ。」
(5) A「部長、週末に子供の運動会があるんですが...」
　　B「{だから／*なので}（↑）」

③ 尾谷昌則(2020)「接続詞化した「なので」の発話機能について」『日本語用論学会第 21 回大会発表論文集』 pp.225-228.

これは、2019 年に日本語用論学会ワークショップにおいて口頭発表したものを論文化したものである。この論文では、「なので」が接続詞化した理由について、「発話調整機能」という観点から論じ、接続詞化した「なので」は少なくとも 4 つの点において発話調整機能が高まっているため、それが接続助詞から接続詞へと変化した動機であると主張した。以下、4 つの点について簡潔にまとめる。

1 点目は、終助詞との共起が可能になるという点である。従属節から独立した一文になることで、以下の例のように、終助詞が使用可能になる。発話末に使用される終助詞は、対人的モダリティを担っており、聞き手が話者の意見に同調している雰囲気を作ることができる。

(6) a.*水資源は大切です {よ／ね／よね} ので、有効活用を考えなければならない。
　　b. 水資源は大切ですよね。なので、有効活用を考えなければならない。

2 点目は、ノダ文の使用が可能になるという点である。ノダは「既定性」を表すとされ、話し手にとって既に定まった事実であるということを伝達する。そのため、以下のように前件でノダ文を用いることで、その根拠が疑いようのない事実であると言うことになり、ひいては、それが後件における主張の正当性をも相対的に強調することができるという効果がある。

(7) a.*水資源は大切なんですので、有効活用を考えなければならない。
　　b. 水資源は大切なんです。なので、有効活用を考えなければならない。

3 点目は、「言いさし文」での使用が可能になるという点である。これは、話し言葉においては大きな利点である。綺麗に結ばれていない文（発話）でも、接続詞の「なので」を使用すれば、強制的に帰結節を導くことができるようになる。実際の会話は、校正を重ねた文章表現とは異なり、考えながらリアルタイムに発話されるため、このように修正を行いながら発話をすることは

珍しくない。

（8）a.*水資源は大切っていうか……ので、有効活用を考えなければならない。

b．水資源は大切っていうか……。なので、有効活用を考えなければならない。

4 点目は、「なので」の支配域が広がるという利点である。接続助詞を用いた以下の例 a では、従属節の部分しか根拠として解釈されないが、接続詞「なので」を用いた b では、その前にある 3 つの文をまとめて根拠にすることができる。

（9）a.水資源は限られている。枯渇する危険性もある。生命は水無しでは生きられないので、有効活用を考えなければならない。

b.水資源は限られている。枯渇する危険性もある。生命は水無しでは生きられない。なので、有効活用を考えなければならない。

以上のように、様々な目的で発話を調整する機能が高まっているため、接続助詞「ので」から接続詞「なので」へと変化した動機として、以上の 4 点は十分に妥当なものと考えられる。

④ 尾谷昌則 2020（発刊予定）「「なので」が接続詞化するまで」『動的語用論の構築に向けて（第 2 巻）』70-91.

この論文は、2018 年秋に日本語学会で発表した内容の一部を修正・加筆したものであり、「なので」の接続詞化プロセスについて説明する「再分析説」と「指示詞省略説」の妥当性について議論した。特に、旧形式と新形式の出現時期の連続性についてさらに分析を深め、「なので」が接続詞化するまでのプロセスとして概ね以下の 5 段階に分けて考えることができることも主張した。接続助詞である第 1 段階から、句点の挿入によって文をぶつ切りにしたのが第 2 段階であるが（用例が少ないため、逆接のノニの例も入れてある）、使用数が非常に少なく、定着しなかった。第三段階は、ポーズ挿入をした例であり、本論で「再分析説」と呼んだ説の元になっている用例でもある。しかし、この使用例もわずか 2 件しか発見できず、定着しなかったと思われる。第 4 段階では、指示詞「それ」を用いた「それなので」という表現が出現する。こちらは、戦後もコンスタントに使用例が観察されるため、定着したものと判断できる。そして、接続詞化した「なので」が出現するのが第 5 段階である。このような用法変遷から見えてくるのは、「それなので」と「なので」の連続性であり、ポーズ挿入によって「なので」が生まれたとする再分析説には、その連続性が観察できないことがよく分かる。

1	接続助詞の用法	「〜〜ので、〜〜」	
2	句点挿入	「。ので」(1909) 「。のに」(1907)　　「。のですが」(1916)	※定着せず
3	ポーズ挿入	「、なので」(1925)　　「――なので」(1930)	※定着せず
4	指示詞＋ナノデ	「それなので」(1934)	
5	指示詞の省略	「。なので」(1966)	

表 2：「なので」が接続詞化するまでの変遷

加えて、本論では順接の「なので」よりも逆接の「なのに」の方が先に接続詞化した事実を指摘し、その原因は本論が「引っ張り効果」と呼んだものに起因するということを指摘した。坂梨（1979）では、逆接を表す接続助詞「（だ）のに」が「（な）のに」へと変化した一因として、順接の「なので」の影響があったと論じているが、本論でこれらの接続助詞が接続詞化した時期を調査したころ、坂梨（1979）が指摘した順序とは逆で、「なので」よりも逆接の「なのに」の方が早く接続詞化していることが分かったのである。（以下の表では、■が坂梨論文の指摘した用例、●は『日国』に記載の使用例、▲は国会会議録からの用例、△は青空文庫からの用例、▽は日本語歴史コーパスからの用例であることを表す。）

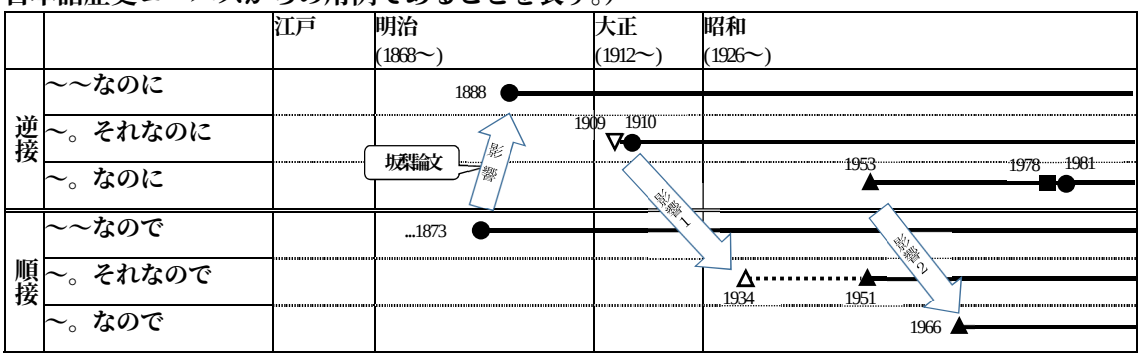

表 3　ナノニ類とナノデ類の発生時期

ここで問題になるのは 2 点である。まず、「なので」が接続詞化した背景には、既に接続詞化

していた逆接の「なのに」の影響があったのかということである。順接と逆接は、正反対の概念ではあるものの、対を成すという点では共通性が認められる。坂梨（1979）では、「（な）のに」の存在が「（だ）のに」の発生に影響を与えたことを認めているが、であれば、逆に「なのに」が「なので」の発生に影響を与えたとしても不思議ではない。つまり、「なので」が生まれた背後には、「なのに」からの類推があったと考えてもよいだろう。

もう１つの問題は、接続助詞が「（だ）のに」から「（な）のに」へと変化した時期が、「なので」発生よりも遅かったにも関わらず、接続助詞から接続詞化した時期は逆に「なのに」の方が早かったという事実である。発生順が逆転しているこの事実について、本論では「引っ張り効果」という観点から説明を試みた。「引っ張り効果」とは、例えば「カップラーメンに納豆を入れるなんて、想像しただけでも気持ち悪い、、、、、のにアリです。」というように、前半で述べた事柄に対してすぐに言葉を継ぎ足さずに、聞き手（もしくは読み手）に発話解釈の時間を与えるためにしばらく間を置いた上で、後から聞き手にとって意外な帰結となる内容を述べることで、聞き手に驚きを与えたり、会話を盛り上げたりすることである。

こういった効果は、後件発話に逆接表現を用いた場合の方が明確に出やすい。聞き手は前件発話から様々な想定を引き出すが、それが後見発話で見事に裏切られるので、聞き手の認知環境が大きく変容するためである。一方で、順接の接続詞の場合は、前件発話から想定される内容が後件に来やすいため、それほどのインパクトはない。

（10）a.太郎はまだ若い……のに、もう部長だよ。
　　b.太郎はまだ若い……ので、まだ係長だよ。

こういった違いは、そのまま使用数の差になって表れている。BCCWJ で接続助詞の直前に読点が 2 つ以上挿入されている用例を検索したところ、明らかに逆接における使用例が多かったのである。このことは、引っ張り効果が逆接において顕著に見られることの証左といえよう。

逆接	
、、が	8 件
、、けど	5 件
、、のに	1 件

順接	
、、から	0 件
、、ので	2 件

表 4：　BCCWJ における複数読点と接続助詞の共起状況

⑤ 尾谷昌則 2019.「「案外」と「意外」の用法変遷と新しい副詞用法について」『法政大学文学部紀要』第 79 号、pp.47-66.

この論文は、「案外（に／と）」「意外に／と」の用法変化について調査・記述したものである。「案外」は単独でも副詞として使用できるが、語源は「案の外（ほか）」であり、明治期には「案外の」「案外な」という形で名詞、もしくは形容動詞として使用されていた。「意外」も、「意外の」や「意外な」という語形で用いることが多く、「案外」と同じく名詞用法と形容動詞用法が主流であった。しかし、大正期に入ると、「案外」は無助詞で副詞的に使用する用法へと一気に傾き、「意外」は形容動詞へと傾いたことを明らかにした。ただし、「意外」が形容動詞用法へと傾いたとはいっても、連体修飾と連用修飾（副詞的用法）の 2 種類がバランスを保っていた点で、副詞（＝連用修飾）へとほぼ一本化された「案外」とは異なる点である。

また、これらの変化は、決して偶然の結果ではなく、意味の類似した両者の間に、形態・統語的な棲み分けの意識が働いた可能性があることも指摘した。例えば、形容動詞的用法だけを取り出してみると、「意外だ／な／に」の使用頻度が高くなるにつれて、「案外だ／な／に」の使用頻度が低下するという一致減少が見られた。また、形容動詞用法のうち、「案外に」「意外に」という副詞的な用法のみを見てみると、単独で副詞となる無助詞形「案外」の使用頻度が上がるにつれて、両者の使用頻度が下るという一致現象も見られた。

さらに、比較的新しい語形である「案外と」「意外と」の発生についても調査し、「案外と」の初出が、先行研究の指摘よりも早い 1956 年に確認できることを指摘した。「意外と」の用例が出現しはじめる少し前に、「案外と」の用法が出現していることから、「案外と」をモデルとして「意外と」が類推拡張した可能性があることを示した。一方で、「案外と」の出現については、「と」が省略できる他の副詞からの類推によって生まれた可能性があると主張した。このような言語変化は、原因を１つに限定・確定させることが極めて困難ではあるが、少なくとも、形態的特徴が類似する表現が多く存在することは、類推拡張を引き起こすきっかけにはなる。

最後に、「意外」が、助詞を伴わずに単独で副詞として使用されている事実を指摘した。

（11）意外軽いモノだな。
（12）150ｃｍ台の男の人って意外かわいいぞ顔にもよるが
（13）寮生活って人生初。。意外よく寝れた！！

こういった用法は、明らかに「案外」からの類推と思われる。「に」が脱落して副詞化した事例は、これまでにも「さすがに」→「さすが」や、「本当に」→「ホント」などがあるため、(11)～(13)の例も、これと同じ現象であると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 尾谷昌則	４．巻 14
２．論文標題 「接続詞化した「なので」の発話機能について」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『日本語用論学会第21回大会発表論文集』	６．最初と最後の頁 225-228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 尾谷昌則	４．巻 79
２．論文標題 「「案外」と「意外」の用法変遷と新しい副詞用法について」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『法政大学文学部紀要』	６．最初と最後の頁 47－66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15002/00022415	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 尾谷昌則	４．巻 2
２．論文標題 「なので」が接続詞化するまで	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『動的語用論の構築へ向けて　第2巻』	６．最初と最後の頁 70－93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 尾谷昌則	４．巻 19
２．論文標題 書評論文 Cognitive Linguistics	５．発行年 2018年
３．雑誌名 語用論研究	６．最初と最後の頁 106-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 尾谷昌則
2．発表標題 「なので」の接続詞化とその用法について
3．学会等名 日本語学会2018年度秋季大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 尾谷昌則
2．発表標題 接続詞化した「なので」の発話調整機能について
3．学会等名 日本語用論学会第21回大会
4．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

1．著者名 東森勲・柏本吉章・塩田英子・大津隆広・村田和代・米倉よう子・尾谷昌則	4．発行年 2017年
2．出版社 朝倉書店	5．総ページ数 180（139-162）
3．書名 対話表現はなぜ必要なのか ―最新の理論で考える―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考